

## トピックス 亀戸スポーツセンター教室再開！

新装成った亀戸スポーツセンターでの太極拳教室が6月12日（土）から再開されました。第1期（6月から8月）の受講者は総数50名、うち未経験の新入会員は11名です。いつものことですが、前々からの皆さんが新しい方々を包み込んで楽しくリラックスした雰囲気の良い教室にしてゆきたいことを皆さんにお願いして、新入会員に対する導入ガイダンスから初練習を始めました。ご覧の写真のように、広くて明るく、また、1面が広い窓で、残りの3面が鏡という素晴らしい3階小体育室は、講師としても、また生徒さんにとっても、とてもやりやすい場所です。



## 東京都支部大会参加第一次募集締め切る

9月24日（月）開催の第6回東京都支部大会の第一次申し込みを6月末で締め切りました。申込者数は瑞江鶴の会 14名、東大島鶴の会 11名、計25名です。  
なお、今後2次募集もあると思いますので、その際にはまたご案内します。

## 「太極拳まるごと勉強会」会員募集中

太極拳の歴史や理論やそれにかかわる中国文化など、あるいは身体の仕組みなどを広範に勉強しましょうという趣旨で「太極拳まるごと勉強会」を10月から発足させます。これは実技ではなく座学の会です。

以下のように参加者を募集しておりますので、私の担当教室以外の方でもご興味のある方の参加は大歓迎です。ぜひ小生までお問い合わせください。詳細をお知らせします。ただし定員になり次第打ち切らせていただきます。

開催日と時間； 平成24年10月から約2年間の予定

午前の部 毎月第2水曜日 10時から11時30分まで (二朝会)

夜の部 毎月第3水曜日 18時30分から20時まで (三夕会)

場所； タワーホール船堀（地下鉄都営線船堀駅前）会議室

会費； 3ヶ月でxxxx円（資料代、講師料、部屋・設備使用料、連絡通信費等すべてを含む）

定員； それぞれ25人程度とする

主宰； 茶木 登茂一（楊名時太極拳師範・日本健康太極拳協会会員・同東京都支部代議員）

住所 〒134-0087 江戸川区清新町x-x-x-x-x-x-x-x

自宅電話 03-x-x-x-x-x-x-x-x メールアドレス [t\\_chaki@mte.biglobe.ne.jp](mailto:t_chaki@mte.biglobe.ne.jp)

注： 会費、住所、電話番号はネット上では非公開とさせていただきます。

詳細はメールでお問い合わせ願います。

## 江戸川区教室交流会延期

第3回の江戸川区教室交流会を企画していましたが、今年は8月までの会場確保が出来ませんでした。9月は東京都支部大会があり、10月か11月には北地域の野外太極拳も予定されていますので、残念ながら来年春以降に延期することといたしましたので、お知らせします。

## 閑人閑話

### 山口百恵の歌と般若心経で送る

個人的な話で恐縮ですが、さる6月10日妻の母が104歳で天寿を全うしました。当人の兄弟や知人友人もほとんどが存命していないということもあって、まったくの家族葬として子供、孫、曾孫ら二十数人で送りました。菩提寺のご住職と斎場との都合がうまく調整できなかつたこともあるのですが、ご住職のお許しを得て、あえてお坊さんと呼ばずに家族みんなで静かに送ろうということになりました。

お通夜も告別式も、喪主を務めた故人の孫が先導して全員で般若心経と光明真言を唱えました。若い世代にはまったくはじめて出会う般若心経だったと思いますが、これはこれで、お坊さんの唱えるお経を皆目意味も分からぬままにただただ聞くのとは違って、とても意義のあることだったと思います。私もお通夜の席では般若心経についてのうんちくを多少しゃべらせてもらいました。

出棺のときが近づくと、聞いたことがある歌が静かに流れてきました。それは山口百恵の歌う“さよならの向こう側”（作詞；阿木燿子、作曲；宇崎竜童）、1980年10月の彼女の引退コンサートの最後を飾った歌です。

“何億光年輝く星にも寿命があると 教えてくれたのはあなたでした 季節ごとに咲く一輪の花に無限の命 知らせてくれたのもあなたでした”で始まり、親切と、優しさと、ほほえみと、愛と、そしてすべてに感謝するフレーズが続き、“さよならのかわりに”のリフレインで終る歌ですが、山口百恵の透明な歌声とあいまって、不思議なくらいこの場にふさわしい葬送歌となっているのに驚きかつ感動しました。

最後に、参列者全員が故人への感謝や思い出や送る言葉を綴った寄せ書きと、私の妻が謹写した般若心経とを柩に納めましたが、これも若い喪主の感性が引き出した天寿の別れにふさわしい儀式のひとつでした。 合掌

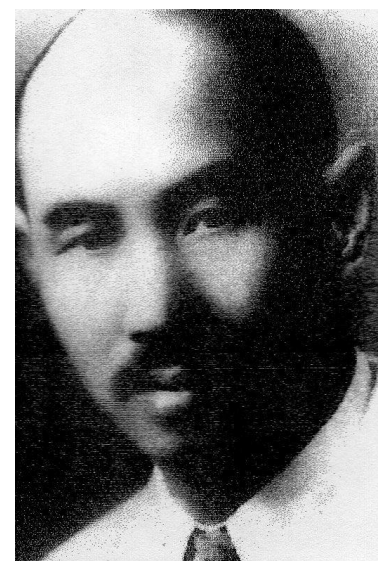
## 左顧右眄～さこ・うべん～ (61)

### 【第11話 拳の達人<sup>おうこうさい</sup>王向齋とその「意拳」

### について】(続き)

#### 第3章 世界に名を上げた王向齋

王向齋は右の写真のようにたいへん物静かで細身で、学者のような風貌をしていて、とても武術家には見えなかつたといわれています。ところで、1930年という、上海には欧米諸国の租界が出来ていて、当然のことながら、中国の武術家と彼らとの他流試合が国威を賭けて行われていた時代ですが、王向齋はそこでたいへん派手な試合をしています。それは元世界ライト級チャンピオンのハンガリー人イングルとのボクシング風の試合です。当時イングルは多くの中国武術家との試合に勝ち



続けていて、“中国武術はたいしたことはない”と豪語しており、上海市民はみな切齒扼腕<sup>せつしやくわん</sup>していたのです。

そこで、上海最大の秘密結社「青幫<sup>チーバン</sup>」の頭領であった杜月笙<sup>とげつしょう</sup>らが賞金を出してのいわゆる賞金試合を提案したのですが、いろいろないきさつから王向齋がそれを引き受けざるを得なくなったのです。試合の様子については酒見賢一氏の『王向齋』（中国雑話中国的思想・文春新書）から引用してみましょう。

“ゴングが鳴るやイングルは前に出て、ショートパンチからの右を王向齋の顔面に打ち込んだ。王向齋はガードをするためというでもなく、ふと腕をあげてイングルの手首に触れさせた。次の瞬間、イングルは崩れ落ちており、しかも失神していた。……後にイングルは「私が見た中国拳法」と言うタイトルの記事をロンドン・タイムスに寄せて、この試合のことを書いた。「わたしの腕が王老師の腕に触れた途端、まるで電気に打たれたように感じ、心臓が飛び出すかと思った。中国武術侮りがたし。」と述べている。電気ショックを受けたような打撃というのはそれまでに王向齋と対戦した中国の武術家や弟子たちが等しく語っているところで、王向齋の拳の特徴である。……”（これが「発勁」であることは間違いないようです。）

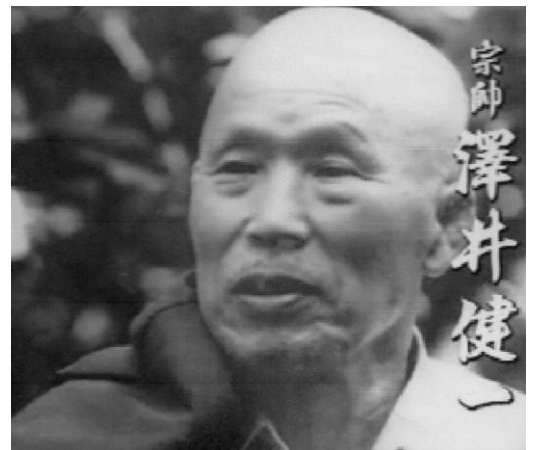
またこの数年のちには日本の柔道家八田一朗（1906～1983 後のレスリング王者、日本のレスリング界草創期のリーダー）とも対戦していますが、王向齋は八田に自由に袖とか襟を取らせてくれるのだが、それでも何の技も掛けられなかったと、八田自身が語っています。こうしたことで王向齋の名声は内外に高くなり、ついには「国手」と呼ばれたり、彼の拳にも“中国拳法のあらゆる門派の技を集大成した”という意味の「大成拳」という称号が与えられもしました。（彼自身は大成などありえないとしてこの称号を使わなかったといえます。）

日本の敗戦前後の中国の混乱の中では彼は政治的には中立的な立場で終始し、新中国になってからはもっぱら医学や生理学の研究に没頭して、「意念站樁養生健身功<sup>たんとう</sup>」の普及に努めました。“人が病気になるのは内臓や循環の機能が平衡を失うからである。站樁功によって人は人体内外のバランスと機能の改善強化を果たすことが出来る。”“養生と拳術は一つのものである。自分の平衡を保つ力さえ養われれば、後は実際の状況に応じて本能的に技を発すればよい。”などの発言が残されています。

実際には共産党政権下では、相手と戦うような機会も無く、また政治的な理由からも許されなかったという時代背景があったということのようです。妻を失って失意の中で、1963年に没しました。

#### 第4章 意拳から生まれた日本の太気拳

話は終戦前の北京に戻りますが、その頃王向齋に挑戦した澤井健一（1903～1988）という日本の武術家がありました。柔道5段、剣道4段、居合道4段という腕前でしたが、柔道で挑戦しても、剣で相手をしてもらっても、全く勝負にならず、一転して彼に入門を請います。それは、日中戦争の真っ最中で当然反日感情の強い時ですから、弟子たちの中には日本人の入門に反発もあったのですが、王向齋は彼の熱意にほだされてあえて入門を許します。澤井健一36歳のときとされています。彼は後に王向齋の後を継ぐ姚宗勳<sup>よう</sup>の家に起居して修行したといわれています。（この子息の姚承光氏と姚承榮氏らが現在の意拳のリーダーです。来日して日本と交流しています。）もともと素質があったこともあり、門人の中でもとくに眼をかけられてめきめきと上達したのですが、1945年に終戦を迎えます。澤井が失望のあまり家族ともども一家心中しようとしたのを、王向齋から“生きて日本に帰るべし”と諫められて帰国します。彼は1947年に師の許しを得て東京で「太氣至誠拳法」通称「太気拳」を創設します。



澤井健一は後の極真空手の創設者大山倍達（1923～1994）などとも親交があり、ともに大いに研鑽を積んだとされています。大山倍達の伝記劇画として有名な『空手バカ一代』に、唯一彼が敗れた中国拳法の達人として登場する“陳老人”のモデルがこの澤井健一だとされています。

極真空手の初期のころ高校1年で大山道場に入門し、のちに世界大会で何度も優勝した<sup>ろやま</sup>慮山初雄（1948～）も澤井に大きな影響を受けた一人です。極真空手の修行に行き詰まっていたときに、澤井に声をかけ



られて、いったん極真空手を離れて健一の太気拳に入門して心技を磨き、再び極真空手に復帰します。現在極真空手道連盟極真館の館長など要職を務めています。太気拳の道場には現在でも他の格闘技の選手たちが入門して学んでいるという伝統が続いているようです。

太気拳関連のHPや動画を見る限りの知識ですが、立禅・揺り・這い・という独特な基本功を持っているようです。戦い方は、比較的高い姿勢でとにかく前へ前へ出るフットワークと、非常に速い打撃を主に、接近すればもちろん足技、投げ技、関節技など多彩な技を持っています。太気拳の指導のビデオや極真空手との他流試合の

ビデオなどを見て気がつくことは、相手の攻撃をいなして、あるいは見切って、直ぐ関節技を使って相手の動きを封じてしまう、あるいは相手を背勢にしてしまうのが非常に巧みなことです。

「気」という概念を戦後の日本の武術界に持ち込んだのが澤井健一であることは間違いないようですし、慮山初雄も“体が小さくとも、年をとっても勝てるのが太気拳だ”ということを彼に徹底的に教えられたと書いています。澤井は80歳を越えてもなお矍鑠として実戦を続けていたということも、残されている動画から確認することが出来ます。

## 終わりに

新中国では、中国武術、拳法、の実戦型の試合、いわゆる“散手”は政治的な事情からずっと禁じられていました。前にも書きましたように、文化大革命が収束したのち、1980年代になって初めて“散手”という形態を復活することが許可されたのです。意拳の関係のHPによると、1982年4月に北京で開催された「第1回全国散手大会」に出場した意拳の姚承光選手は試合開始47秒、右パンチ一発で相手をKOしました。すぐ救急車で病院に運ばれたが重傷だったといえます。このため意拳の選手は後続の試合でも出場禁止となり、そればかりか、長らく大会への参加すら認められない状態が続きました。ようやく1998年になって意拳独自の散手大会を開くことが当局から認められたとも書いてあります。その威力が垣間見えるエピソードではあります。

## 旅をうたい拳を詠む 近詠四首

街を行く若い娘のなま脚に初夏の実感ひとつ加える  
もろもろの元素の寄りてわれあると知らばわれ即花鳥風月  
駅前の本屋の閉じしその跡に調剤薬局またまた増殖  
104歳の義母は天寿を全うす 生まれしころは西太后の御世